

平成 20 年 10 月 13 日

九州大学大学院経済学研究院
産業マネジメント部門長
星野裕志 殿

出張等報告(記録)書

報告者

ICABE 学生交流推進プロジェクト
<チュラロンコーン大学・タマサート大学訪問チーム>

教員代表

経済学研究院教授 村藤功

経済学研究院准教授 高田仁

学生代表

産業マネジメント専攻 5 期生 小寺雄一

産業マネジメント専攻 5 期生 富松寛考

大学改革推進等補助金による出張を下記のとおり行いましたので、報告いたします。

記

1. 費用の負担

平成 20 年度大学改革推進等補助金

2. プログラム名称

ICABE 学生交流推進プロジェクト(第 9 回)

3. 用務地

タイ(バンコク)

4. 用務先

- ・ JETRO バンコク事務所
- ・ チュラロンコーン大学
- ・ タマサート大学

5. 用務の概要と事業の関連について

< 用務の概要 >

学生間討論会、タイ経済関係者との交流

< 事業の関連 >

ICABE に基づく学生間交流、タイ経済関係者との交流を通して、タイの最新事情把握によるアジア市場に対する理解の深化と、提携先ビジネススクールとの連携強化のためのネットワーク形成を図る。

6. 出張日程

平成 20 年 8 月 21 日(木) ~ 8 月 24 日(日) 24 日はオプションツアー

7. 参加者(合計 19 名)

(QBS 教員) 計 2 名

村藤功 教授

高田仁 准教授

(産業マネジメント専攻 2 年) 計 8 名

小寺雄一(学生リーダー)

富松寛考(学生副リーダー)

江上直人 あいうえお順

鎌田幸治

篠崎真美

久枝良彰

村田素子

山本英樹

(産業マネジメント専攻 1 年) 計 8 名

浦上早苗 あいうえお順

岡本洋幸

河本敬嗣

小林亜希子

寺崎一生

中川将志

八尋大八

三浦智穂

(QBS 卒業生) 計 1 名

中西裕二

ICABE 学生交流プロジェクト

目的: International Consortium of Asian Business Education (ICABE)に基づく学生交流事業の一環として、チュラロンコーン大学とタマサート大学と下記の合意に基づき、タイの最新事情把握によるアジア市場に対する理解の深化と、提携先ビジネススクールとの連携強化のためのネットワーク形成を目指す。

ICABE の正式活動としては人的ネットワークの形成と知の共有化を図りながら、今後のQBS の提携校の交流モデルを探求する。

交換留学制度の実現に向けたディスカッションを行う。

学生同士が主体となりながら、双方向での討論を行い、今後の国際交流の発展となるような関心領域の共有を図る。

日程:

8月21日(木)

10:00 福岡空港国際ターミナル集合

11:45 TG649 便(バンコク行き)で福岡を出発

15:05 バンコク空港に到着し、バンコク市内ホテルへ移動

16:30 Imperial Queens Park Hotel に到着し、チェックイン

19:00 Phatai 氏(ディレクター、国際貿易情報センター、九大 OB)と懇親会

宿泊: Imperial Queens Park Hotel

8月22日(金)

10:00 JETRO バンコク事務所を訪問

(鶴岡将司氏による講話:タイ経済動向、日系企業の動向) **【活動報告】**

11:30 JETRO からチュラロンコーン大学へ移動

12:00 チュラロンコーン大学食堂にて昼食

13:00 チュラロンコーン大学と交流プログラム

・ チュラロンコーン大学教授陣によるタイ経済に係わる概要説明

・ 学生間討論会

物流・自動車産業(チュラロンコーン大学、QBS) **【活動報告】**

観光産業(チュラロンコーン大学、QBS) **【活動報告】**

18:00 チュラロンコーン大学学生、交換留学生と懇親会

宿泊: Imperial Queens Park Hotel

8月23日(土)

09:00 タマサート大学と交流プログラム(午前の部)

- ・ タマサート大学特別講義 **【活動報告】**
 - Swierczek 教授: Doing Business in Thailand
- ・ QBS 特別講義 **【活動報告】**
 - 村藤教授: Doing Business in Japan
 - 高田准教授: How to deal with Open Innovation

12:00 タマサート大学食堂にて昼食

13:30 タマサート大学と交流プログラム(午後の部)

- ・ 学生間討論会
 - 農業(タマサート大学、QBS) **【活動報告、】**
 - 雇用/HRM(タマサート大学、QBS) **【活動報告、】**

19:00 タマサート大学学生、交換留学生と懇親会

24:45 TG648 便(福岡行き)でバンコクを出発(村藤、高田、中西、久枝、三浦、浦上、中川)

宿泊: Imperial Queens Park Hotel オプションツアー参加者は当日宿泊

8月24日(日) オプションツアー

09:00 バンコク市内観光

24:45 TG648 便(福岡行き)でバンコクを出発

8月25日(月)

08:00 福岡空港に到着し、現地解散

(小寺、富松、鎌田、篠崎、村田、山本、江上、寺崎、八尋、小林、岡本、河本)

【活動報告】タイ王国の投資環境と経済動向

説明者: JETRO バンコク事務所 鶴岡将司氏

報告者: QBS6 期生 岡本洋幸

タイの概況と投資環境

- タイ経済は 2000 年以降順調に成長しており、07 年の GDP 成長率が 4.8%となっている。ただし、原油や資源価格の高騰により、物価は上昇しており、08 年 7 月には 9%と大幅に上昇している。
- タイの人口は 6,576 万人(06 年)で我が国の半分程度であるものの、ASEAN(10 カ国)で見ると、ASEAN の人口は約 5.6 億人で、EU(5.0 億人)や NAFTA(4.3 億人)を人口規模で上回り、世界最大の経済ブロックである。
- 06 年の名目 GDP は 2,063 億ドルとわが国の 3.9%となっており、ASEAN ではインドネシアについて第 2 位である。1 人あたりの GDP は 3,138 ドル(日本の 7.4%)、ASEAN では第 4 位となっている。
- GDP の構成比をみると製造業が 34.7%をしめており、ASEAN の中では工業化が進んでいる。投資奨励法による法人税や機械・設備輸入税などの免税により、製造業の外資参入を奨励している。一方、サービス業では外資系企業の参入が規制されている。
- 近年、「チャイナプラスワン」としては、タイよりもインドやベトナムの存在感が増しているが、タイでの産業の集積や市場の拡大に伴い、依然諸外国より強い関心を集めている。
- タクシン氏の裁判や反政府デモなど、政界は不安定であるものの、成長センターであるアジアに囲まれている強み、ASEAN での存在感の拡大などの好材料がある。

日本とタイの結びつき

- 日本は、タイにとって重要な貿易相手国であり、日本への輸出額は第 2 位、輸入額については第 1 位となっている。また、タイへの直接投資国では、日本が第 1 位である。
- 自動車産業を始め、日系企業の進出が盛んである。日系企業の進出に関する明確なデータはないものの、バンコク日本人商工会議所の加盟企業数は 1,290 社と、上海につぐ規模を有している。日系企業の総従業員数は、51.9 万人である。
- 「アジアのデトロイト」と呼ばれるように、自動車産業はタイの主要産業のひとつである。トヨタや日産などの日系主要組立メーカーがタイに進出しており、タイの自動車生産台数の 9 割を日系メーカーが占める。デンソーや豊田紡織などの部品メーカーの進出により、産業としての厚みが生じている。なお、タイの自動車生産台数は 120 万台(06 年)であり、100 万台を生産する九州とほぼ同じ規模である。

以上

【活動報告】タイの自動車産業概観

発表者: チュラロンコーン大学 IMBA 学生 Nitipun Kruttin (Mr)

報告者: QBS6期生 三浦智穂

〈報告〉

1. 産業概観

- ・ 1998年～2006年の平均成長率は35%
- ・ 自動車産業が20万人の雇用を創っている
- ・ 最近の製造量
 - 車とトラック 1.1百万台/年
 - オートバイ 2.2百万台/年
- ・ タイの製造車の80%は1800cc以下の乗用車と1トンピックアップトラック
- ・ タイはASEANの中で最も大きい自動車産業集積地であり、最もクオリティが高い
- ・ タイは次の理由により自動車の投資先として最も魅力的な国である
 - 国内市場のサイズがちょうどいい
 - マーケットの成長可能性
 - 自由貿易と投資政策(FTAとBOI)
 - 価値体系の利害衝突がない
 - 国に自動車プログラムがない
 - 輸入から輸出重視の産業への成長
- ・ タイには各自動車メーカーの工場がある
- ・ 三菱、フォード、マツダ、GM、いすゞ、トヨタは1トンピックアップトラックの主要工場をタイに置いており、他のメーカーの進出も期待される
- ・ タイの人気車は1トンピックアップトラックで、その売上げ規模は市場の50%を占めている。日本のメーカーはタイの国内市場の90%近くを占めている
- ・ 国内自動車産業のサプライチェーンの80%は日本メーカーに所属している。日本系列グループのサプライヤーには、日本メーカーのファミリー企業、日本技術系会社とのジョイントベンチャー、日本と技術提携した会社がある
- ・ 中国はオートバイの一部でタイと競争関係にある。タイよりコストが低い、タイよりも質が悪い

2. タイの自動車産業の発展にかかわる要素

- ・ 効率的な流通インフラがある
- ・ 地理的利点(ASEANの中心に位置)
- ・ 十分なヒューマンリソース
- ・ R&Dの欠如
 - サプライヤーはR&Dに注意を払っておらず、投資に価値を見出していない
 - 設計やテストのほとんどは国外で行われている

- ・ タイにはたくさんのサプライヤーがあり、競争環境が作られている
- ・ ほとんどのサプライヤーが同じ地域におり、サプライヤーチェーンを築いている
- ・ 川上の鋼材は輸入に依存しており、また機械や設備(金型)も輸入に頼っている
- ・ 国内の需要は低い成長は続いている。乗用車の保有割合は8%にすぎない
- ・ ピックアップトラックの需要が高い。
- ・ 高い輸入関税

〈質疑応答〉

- Q. 有名大学出身者は日本企業より欧米企業を選んでいるのか？日本企業で働くことへの印象はどのようなものか？
- A. 自分も日本企業で働いているし、日本企業への印象もよく、同じ大学出身者にしても、とくに欧米企業を選んでいるということはない。ヒューマンリソースが問題となっているが、タイで高学歴の現地人を採用することが難しい。

〈所感〉

チュラロンコーン大学とのディスカッションでは、原油高対策として日本自動車メーカーが各社ともに電気自動車の開発を進めていることに対して、非常に関心が高かった。

タイの自動車産業は、海外自動車メーカーの自国への誘致に依存している面が強い。近年の傾向では、原油高の影響を受け、バイオ燃料車の製造に力を注いでいるようだが、この動きも欧州自動車メーカーの影響を強く受けているようだ。グローバルな自動車産業において、国の産業として経済成長を持続させていくためには、国が何らかのイニシアティブを持って政策を進めていく必要がある。しかし、タイでは自国の自動車メーカーを創設するという政策はとられておらず、いかに海外自動車メーカーを好条件で誘致するかに重点が置かれているようだ。

日本自動車メーカーは、今後の自動車産業のトレンドや世界情勢を注視しながら技術開発により牽引していき、そこに利益獲得の優位性を求めているのに対して、自国に大きな自動車メーカーを持たないタイは、海外大手自動車メーカーの動向に左右される。この点において、日本よりもタイのほうが、国の政策に、当該国の経済が大きな影響を受けるように思った。国の産業保護政策は、文化や地理的条件など諸要素の影響を受け、各国で異なると思われるが、日本では自国の自動車メーカーの保護育成に力を注いできたのと比較すると、タイと日本の政策の違いは非常に面白いと思った。

以上

【活動報告】自動車産業 (Automobile Industry)

発表者: QBS 中西(4期生)、鎌田(5期生)、三浦(6期生)、小林(6期生)

報告者: QBS6期生 小林亜希子

発表ではタイと九州の自動車産業を調査し、それぞれの相違点を検証した。それにより、自動車産業の今後の課題と方向をディスカッションした。

(イントロダクション)

九州における自動車産業の位置づけとタイにおける位置づけを比較し、両者における相違点を述べた。石油価格高騰によるトヨタのリスラ、ホンダの生産台数削減など、自動車産業の今後の課題を挙げた。

(タイの自動車産業)

・アジアのデトロイト

特徴

ピックアップトラックの生産率が高い。外国自動車メーカーが参画する理由として、アジアにおける地理的優位性、経済成長率の高さがあげられる。また、温和な国民性、政府の優遇処置も進出のきっかけとなっている。

(九州の自動車産業)

・カーアイランド九州

特徴

メーカーが工場を進出させる理由として工場面積・労働者の確保があげられる。また、地元政府による優遇処置もある。九大とダイハツによる共同研究に力を入れている。

(今後の課題点)

エコカーへの取組

石油価格高騰に伴い、タイでは2003年からエコカーへの取り組みがされている。九州では電気自動車が注目されている。そのため九州電力は、充電整備の整備を検討している。

多機能職員の確保

各々の産業を発展させるために、研究開発拠点を増やす必要があるが、それにとまなう人材の不足が問題となっている。

以上

【活動報告】タイの観光産業の概略(Tourism of Thailand)

発表者: チュラロンコーン大学 MBA 学生 2 名

報告者: QBS6期生 浦上早苗

<タイ観光の市場規模>

タイの観光収入は GDP の 7~8%に相当し、300 万人(総人口比 8%)の雇用を創出している。政府は今後、観光産業の重要性が増すと考えており、2002 年に環境スポーツ省を設置した。

2006 年時点で、タイを訪れる外国人旅行者数は世界 18 位。うち過半数は太平洋地域からで、国別でみると日本人とマレーシア人が最も多い。比率的には少数だが、中東やロシアからの観光客も増えている。

<2008 年の見通し>

訪タイ外国人旅行者・・・1700~2000 万人(前年は 1446 万人)

観光収入・・・7000 億バーツ(190 億ドル)

国内観光収入・・・3000 億バーツ

<タイ観光の強み>

1. ビーチや熱帯気候といった自然環境
2. 文化や伝統
3. 歴史
4. 食べ物
5. ホテル、ナイトスポット、ゴルフリゾートなどの設備

<タイ政府の施策>

タイ政府は成長持続型の観光産業の確立を目指して、法整備やサービスなど質の強化に取り組み、外国人にとってより魅力的な観光地づくりに取り組んでいる。

また、今後の課題としてはオフシーズン対策やインバウンドとアウトバウンドの不均衡解消、アジアのほかの国々との競争が挙げられる。

以上

【活動報告】観光(Foreign tourist attraction strategy in Thailand)

発表者: QBS 岡本、中川、浦上、河本(発表者順)

報告者: QBS6 期生 中川将志

発表はイントロダクションを含めた5部構成のプレゼンテーションによるもので、初めに国際的な観光産業の現状を説明し、次に外国人の九州観光の現状、そして日本人から見たタイ観光の印象や実体験を交えて述べた上で、タイの優れている点と弱みを明らかにし、最後にタイの強みの1つであるカオサンロードを利用した観光戦略を提案した。

(1部: イントロダクション)

「『75』、この数字が何を意味しているか分かりますか?」という問いでプレゼンテーションは始まった。メンバー3名によるタイ観光の経験談を自己紹介を交えて話し、オチとしてはメンバー4名中1名だけが過去タイを訪れた事がない、つまりこのチームの『75』%は既にタイを訪れた事があり、それくらい日本人にとってはタイ旅行がメジャーな事だという説明を行った。

(2部: リーディング産業としての国際観光)

観光業は21世紀のリーディング産業である。2007年度のデータでは世界のGDPの10.4%を観光業が占め、それに係る雇用も世界中の雇用数の8.3%を占める巨大産業である。国際的に旅行者の数も年々増加傾向にあり、2020年には15億人を超えると言われている。その中でもタイはインバウンドの人数、そして観光収入も増加しているが、一方日本はインバウンドが弱く、「Visit JAPAN キャンペーン」を行い、インバウンド1千万人を目指している。

(3部: 九州へのインバウンドの状況)

九州は大陸からの距離が近く、福岡空港、博多港という大きな国際港があるので、アジアに対する日本のゲートウェイになりうる。しかし現状、韓国からの旅行者が圧倒的に多く、次に台湾、中国という順位になるが、それ以外の国からは認知度が低く、東京、京都が日本のゲートウェイになっている状況である。九州の魅力として温泉、大自然、食べ物があり、実際に韓国人からは好評を得ている。

(4部: 日本人から見たタイ観光の印象)

タイ観光の3つのキーワード「リゾート型」、「都市型」、「地方密着型」をあげ、中でも「地方密着型」の旅の貴重な体験、すばらしさを発表者の実体験を元に説明した。タイの地方都市にも大きな魅力があり、そこに観光者を導く事がタイ観光のインバウンドを増やすポイントになる。現状、バンコクなどの都市に集中する旅行者は次の目的地としてベトナム、ホーチミンなどの隣国を目指してしまうので、それをタイの地方都市に目を向けてもらうことが重要になる。

(5部: タイ観光の戦略提案)

4部でも述べたタイの地方都市へ観光客を導くためには、旅行者に対し地方都市の「情報」や

「ネットワーク」を提供する事が重要である。今回のプレゼンテーションのポイントであるバンコク「カオサンロード」にその解があり、すでにカオサンロードには旅行者への「情報」、「ネットワーク」が存在している。カオサンロードを利用してタイの地方都市拠点とネットワークをつなぐことで、カオサンロードに集まる旅行者をタイの地方都市へと導く事ができるのではないか、という提案を行った。

以上

【活動報告】タマサート大学特別講義(Doing Business in Thailand)

発表者:タマサート大学 Swierczek 教授

報告者:QBS6 期生 寺崎一生

< 市場の概要 >

- ◆ タイの経済は輸出に依存しており、輸出額は GDP の 60%にあたる。
- ◆ アジア通貨危機以降、タイの GDP 成長率は 5,6%である。
- ◆ 暫定軍事政権下では外資企業に対して多くの規制が課せられたが、新政権下では海外からの投資に友好的であり、海外投資家の信用回復に取り組むものと思われる。

< 市場の課題 >

- ◆ タイのビジネスや消費者は価格重視でしばしば品質よりも低価格が好まれる。
- ◆ 最恵国待遇の平均関税率は 11%であるが、地方との競合商品には高関税を課しているため、アメリカからは是正が求められている。
- ◆ アメリカ企業からは政府調達の透明性確保が知的財産保護と同様に期待されている。

< 市場の機会 >

- ◆ タイの経済成長によってアメリカ企業はインフラ整備に関する参入機会を得た。
- ◆ 新政権下でもバンコクの高架鉄道や地下鉄などインフラ整備は継続されている。

< アジア諸国との競争力比較 >

- ◆ タイの強みとしては国内需要の高さ、インフラ整備、知的所有権の保護などが挙げられる。
- ◆ 弱みとしては技術者不足、石油価格、政治不安などが挙げられる。

< スタートアップ・コスト >

- ◆ アジア諸国で比べると事業を始めるコストは低く、起業しやすい環境にあるが、欧米と比較すると依然としてコストは高い。

(感想)

タイは日本の政治と経済の関係に似ており、タクシン政権が軍事クーデターで転覆したものの、タクシン政権から実施した経済政策は逆行することはなく、今後も積極的に海外投資受け入れて、経済成長していくように感じた。タイには多くの日本企業が進出しているため、日本人である私たちはつい日本企業の動向にばかり目が行きがちであるが、タイでのビジネスを考える上ではタイの基幹産業に浸透しているアメリカ企業の動向を見落とせないことが分かった。

また、日本にいと日本対アジアという視点で比較しがちになるが、今回の特別講義では、タイから見たアジアの比較について解説があり、日本からの視点だけでは見落としがちな指摘があり興味深かった。タイはここまで経済成長を続けてきたが、その成長に伴う人件費や物価の上昇によって、かつての優位性が近隣のアジア諸国に移っており、研究開発部門の強化など新たな戦略に転換し始めているようで、日本がタイで事業展開する上では今後の動向を今まで以上に注視する必要があるようだ。

以上

【活動報告】QBS 教授特別講義

発表者：村藤功教授、

報告者：QBS4 期生 中西裕二

学生の交換発表に先立ち、それぞれの国のビジネス環境への理解を高めるために、タマサート大教授、QBS 教授陣による講義が行われた。QBS 側は村藤功教授が” Doing Business in Japan”、高田准教授が”How to deal with Open Innovation”というテーマでそれぞれ 30 分程度の講義を行い、講義内容に対してタイの学生からいくつかの質問があった。

1. Doing Business in Japan (村藤功教授)

講義概要

村藤教授は、日本の現状課題と日本企業が将来どのように変化するかを、3つの観点から説明した。

まず、”Economic Environment”では、バブルとその崩壊による土地や金融資産価額の暴落、その結果生じた有利子負債と資産の逆転と、高齢化社会による社会保障制度の限界という日本社会の課題を説明した。

次に”Japanese Company”では、終身雇用制度がもたらす企業風土と、日本企業に浸透し変化を引き起こしつつある自己責任の原則と評価システムについて説明した。

最後に”Japanese Environment”では、バランス感覚が重視される日本のリーダー像と根回しによる意思決定システムについて説明した。

質問・感想等

上記の講義内容に関しタマサート大教授及び学生から、評価システム導入の結果やモチベーションプログラム、ペンション(年金)システムなどについて質問があり、日本企業に勤務するメンバーが多いタマサート大ならではの関心の高さが覗えた。

マクロの視点からミクロの視点まで幅広い講義だったので、30分強では語り尽くせない部分があったと感じた。冒頭のマクロの部分については、QBS 学生にとって毎度お馴染みでありニヤリとさせられる部分もあり、PPT も含め全体にユーモアも散りばめられ、興味深い講義であった。

2. How to deal with Open Innovation (高田仁准教授)

講義概要

高田准教授は、産学連携の視点からのオープンイノベーションへの取り組みについて解説を行った。

まずは九州大学の概要から技術開発の状況、産学連携のストラクチャと現状を、調査データを駆使して解説した。その中で知的財産のマネジメントが重要でもあるにも関わらず、研究者が関心を持っていないことを指摘した。

次に、産学連携の流れがよりオープンかつ複雑化しつつあることを指摘し、知的財産のマネジメントが難しくなる中、どのように管理していくべきか、九州大学の Multi Collaboration Model などのいくつかのケースを解説し、これらのフレームワークを活用し産学連携に取り組みつつある現状

を紹介した。

質問・感想等

上記の講義内容に対し、タイの学生から大学と企業のロイヤリティ配分の考え方などについて質問があった。JETRO の説明でもあったが、先端技術開発や産学連携、そして知的財産に対する関心は日本より低いという印象があった。

高田准教授の説明資料は非常に詳細で、論理的に構成されており、やはり 20～30 分程度で説明するには勿体ない内容であった。

3. 全体感想

日本が置かれている状況を説明し、その中で相手の関心が高いものも含め、短時間で説明することは難しいが、QBS の講義は先方の日本に対する関心を高め、理解を深めるために有用だったと感じた。この講義が事前であれば、学生の交換発表は自己紹介的な内容を減らし、論点を集中して説明するができたのかも知れない。これからも可能であれば存続して頂きたい方法である。

以上

【活動報告】農業と食品(Agriculture and foods)

発表者:タマサート大学 IMBA 学生 Ms. Oyl

報告者:QBS5 期生 小寺雄一

発表はプレゼンテーションによるタイ農業の現状を説明し、タイの農産物の中で特にフルーツは世界的に価格競争力を持つことから、ドライフルーツを日本市場に売り込むための SWOT 分析をワークショップ形式で行われた。

(イントロダクション)

ビジネスとは何か? お金儲けだけではない。企業は地域貢献、環境問題、品質管理などに配慮しなければならない。タイの農業人口は全人口の 60%を占めるのに対して、農業の GDP に占める割合はわずか 12%しかない。農業はもっと持続的に成長しなければならない。それは雇用創出をもたらす、社会問題にもなっている格差対策にもなるからだ。

(タイ農業の強み)

タイ農業物の売りのひとつはフルーツである。安い労働力によって生産されたフルーツは、フィリピンや台湾などに比べて高い価格競争力を持っている。

(日本市場のニーズ分析)

日本は高齢化社会になり、健康ブームなどで消費者のヘルシー食品に対する需要が高まっている。

(参入障壁)

日本市場に輸入する場合、関税、検疫、厳しい農薬成分検査基準がタイのドライフルーツの日本市場参入の障壁となる。

(SWOT 分析) ワークショップ形式

強み:年中多種多様なフルーツが採れる

国内生産のため、生産管理が容易

価格競争力(安い)

農村から直接買い付け(新鮮、安い)

弱み:ブランドが確立されてない(認知されてない)

生産者不足(補足:タイでも少子高齢化が社会問題になっている)

物流コストがフィリピンや台湾と比べて高い

機会:中華料理レストランの増加(フルーツ消費の増加)

(健康ブームで)栄養成分をパッケージに表示(することによって購買が増える)

パンやケーキに加えることで商品化できる

脅威:差別化ができない

日本にはドライフルーツと競合するスナック菓子がある

日本の保護政策

以上

【活動報告】農業と食品(Agriculture and foods)

発表者: QBS 小寺雄一(5期) 江上直人(5期) 寺崎一生(6期) 八尋大八(6期)

報告者: QBS6期生 八尋大八

発表はプレゼンテーションにより閉鎖的といわれる日本農業の現状と農協を中心とした流通システムや道の駅などの店舗型販売戦略を示し、そこから農産物におけるバリューについて具体的な例を示すことで提案を行なった。

(日本の農業の現状と問題点 江上)

現在の日本では農業人口が全就業人口の約5%とタイの54%に比べ10分の1以下となっており、食料自給率も40%をきっている。農業従事者の減少が進んでいることが原因と考えられるが、これは農業における収入が平均に比べて低く、農村出身の若い働き手を引きとめておくことができないことが影響している。またこのことが農業従事者の高齢化に拍車をかけている。

(農業政策とサプライチェーンの変化 寺崎)

日本の農産物における関税は、他の先進国と比べてとても高い。関税と補助金によって守られているといわれる所以である。ところがWTOからの関税引き下げ要求や政府の財政引き締めによる補助金が削減されるなどして、今後の農業は自由化に伴う自立が求められている。このような状況の中、農協を通さずに農家が直接消費者に販売する形態が近年増えてきたが、これ以上の市場の拡大は難しいため、更なる改革が必要である。

(ブランディング戦略 小寺)

外圧や国内事情もあいまって農業を取り巻く環境は非常に厳しいものがある。しかし、そんな厳しい状況の中においても独自の特徴や強みを活かし、他の農産物と差別化することで売上を伸ばしている農産物も存在する。例えば宮崎のマンゴー、佐賀の佐賀牛、そして大分の関サバなどである。これらの商品はただおいしいというだけではなく、見た目や品質管理にも手間をかけ、農産物を一つのブランドにまで高めたことが成功につながった。また、それぞれがもつ新たな付加価値により、販売価格も高く利益率も高い。

(タイ農産物のブランディング戦略 八尋)

最後に、日本で成功した農産物のブランディング戦略に倣って、「カー」というタイ生姜のブランディング戦略を提案した。日本でも生姜といえば古くから風邪薬として重宝されてきたが、カーは日本とタイの大学による共同研究から消化器系のがんの効果があるということが報告されている。まだ臨床段階にはいたっていないものの、日本に比べタイの消化器系のがんの発生率は約半分というデータがその効果を示唆している。日本の少子高齢化や健康食品ブームを利用し、カーを健康食品としてのブランドを確立することで、日本で利益率の高いビジネスモデルを構築することが可能であると提案した。

以上

【活動報告】日本企業での働き方

発表者:タマサート大学 IMBA 学生(2名)

報告者:QBS5 期生 江上直人

プレゼンテーションは男女1名ずつのペアが交互に日本企業の組織、同僚(従業員)、タイとの違い、日本企業での働き方に共感できる/できない点等を説明する形式にて行われた。一般的にタイでは、日本独特の残業の多さや飲みニュケーション文化等はあまり受け入れられないようではあった。

1. 日本企業の組織

協調性を重視する「ホウ・レン・ソウ」(報告・連絡・相談)や報告書の頻度の多さ、年功序列、成果重視よりはプロセス重視の姿勢、ビジネスパートナーとの関係を重視する点などを組織の特徴として挙げた。

2. 日本企業の同僚(従業員)

従業員各人の規律正しさ/統制された組織、同僚間での関係性の良さ、仕事熱心、残業時間の長さを同僚(従業員)の特徴として挙げた。

3. その他の日本企業の特徴

その他の特徴として、オフィスレイアウト、飲みニュケーション、ゴルフ(接待)を挙げた。

4. 日本企業とタイ企業との違い

大きな違いとして、日本企業が極めて組織立っている反面、タイ企業は柔軟性に富んでおり、又、従業員も寛大である点を挙げた。

5. 日本企業での働き方で共感できる/できない点

【共感できる点】

- 統制された組織としての機能性
- 福利厚生の充実
- 終身雇用制 etc.

【共感できない点】

- 残業時間の長さ
- 人事ローテーション(スペシャリストではなくゼネラリスト志向)
- 飲みニュケーション・ゴルフ(特に休日) etc.

以上

【活動報告】雇用(Employment)

発表者: QBS 学生 篠崎、久枝、村田、山本

報告者: QBS6 期生 河本敬嗣

本プレゼンテーションでは、現在日本が抱える労働環境問題の一つとして労働力不足をあげ、その解決策を考察し提言することを目的とした。そして、解決策としては、第一に女性の労働力を活用することをあげ、第二に高齢者層や外国人の労働力を活用することをあげた。

また、解決策の考察と提言に際しては、日本における女性の労働環境について事例をあげて考察した。また、その事例には日本のアニメ「ドラえもん」の登場人物である「しずかちゃん」をモチーフに、大卒女性の労働環境について20代・30代・40代・50代のフェーズ毎に説明した。ちなみに、今回「しずかちゃん」をモチーフとして用いた背景として、現在日本の政策としてアニメ産業を推進しており、タイにおいて「ドラえもん」がよく知られているからである。

(イントロダクション)

2005年・2050年における日本とタイの人口バランスを比較してみる。日本における労働環境の問題として労働力不足がある。そして、それを解決するためには女性や高齢者、外国人の有効的な活用を考慮していく必要がある。

(20代) <大学生>…インターシップ、会社調査、就職活動 <会社員>…入社、新人研修、福利厚生(初任給平均額・通勤手当・住宅手当)、年功序列・終身雇用

(30代) <結婚>…寿退社 or 働き続ける <出産>…産前産後休暇、慶弔金、子育て支援(育児手当・社内保育所・育児休暇制度:男性取得率 0.1%)、パートタイム、復職者支援制度、職場復帰支援制度

(40代) <中間管理職(出世)>…役職手当、中堅管理者研修、リストラ、パート雇用、福利厚生、介護保険

(50代) <社長(出世)>…成果主義、女性の社長比率、退職金・早期退職優遇制度、高齢者雇用優遇制度、団塊世代退職(技術継承)

(まとめ)

これまでの日本の雇用システムは終身雇用が基本で、男性中心の雇用形態であった。また、終身雇用は日本の高度成長において重要な役割を担ってきた。しかし、現在の日本は十分な労働力が不足しており、新たな労働力の活用が必要になってきている。眠れる労働力資源である女性や外国人などを活用することで、新しい日本の経営を進化させることができる。

以上

参加感想

1. 小寺雄一(5期生)
2. 浦上早苗(6期生)
3. 寺崎一生(6期生)
4. 八尋大八(6期生)
5. 富松寛考(5期生)
6. 小林亜希子(6期生)
7. 江上直人(5期生)
8. 岡本洋幸(6期生)
9. 中川将志(6期生)
10. 篠崎真美(5期生)
11. 村田素子(5期生)
12. 山本英樹(5期生)
13. 河本敬嗣(6期生)
14. 中西裕二(4期生)
15. 久枝良彰(5期生)
16. 鎌田幸治(5期生)
17. 三浦智穂(6期生)

参加感想

報告者：5期生 小寺雄一

今回はタイの行政関係者や JETRO 職員からタイの経済について話を聞くことができ、さらにタイの2大国立大学であるチュラローコン大学とタマサート大学の学生と交流できたことは、タイという国を理解するのに貴重な経験となった。

バンコク市内に入って気付いたのは、街の中を走る車がほとんど日本メーカーの車であったこと。JETRO によれば、タイで販売された自動車の約 9 割が日本車であるとのこと。

タイ行政関係者の話しによると、タイ政府は戦略的に自動車産業への研究開発投資をせず、国産車にこだわるのではなく、海外の自動車メーカーを積極的にタイ国内に誘致する政策を取っている。特に日系企業の誘致に力を入れており、トヨタはタイに東南アジア向け輸出車のハブ工場を新設し、日産、ホンダ、いすずなど、主要な日系自動車メーカーはほとんどタイに生産拠点を構え、タイで生産した車をタイ国内で販売したり、東南アジア諸国に輸出したりしている。

タイ政府が日本自動車メーカーの誘致に成功したもうひとつの要因は、税制の優遇措置などで日本の自動車部品メーカーも同時に誘致したことにある。多くの日系部品メーカーがタイに進出したことで、タイ国内で高い部品調達率を実現し、日本自動車メーカーを抱え込むことに成功した。

また、多くの日系企業がタイに進出しているためか、それともタイ国民がもともと親日だからなのか、はたまたタイの真面目な国民性が日本企業の価値観とマッチしたからなのか、タイでは欧米企業よりも日系企業に勤めることがステータスとなっているようだ。実際、ふたつの大学の学生に聞いても、日系企業に勤めているひとや、日系企業に勤めたいという学生が多くいた。このように、タイにおいて日系企業が優秀な人材に対する優位性を持っていることも、多くの日系企業がタイに進出した理由のひとつであろうと推測される。

最後の日に、バンコク市内を観光することができた。いかにも南国らしい色彩鮮やかな寺院、タイ国民に敬愛されるタイ国王が住む王宮、東京新宿と遜色ない繁華街でのショッピング、地元市民が日常生活で利用する水上バス、そして「微笑みの国」の名にふさわしい現地住民たちの純真な笑顔、短い期間ではあったが、タイのいろいろな側面に触れ合うことができた旅であった。

以上

参加感想

報告者：6期生 浦上早苗

2泊4日という短い滞在期間で、現地の雰囲気を楽しむ時間までは確保できなかったが、概ね有意義なプログラムだった。

私は通常業務で表面的な動きが少ない分野を担当しているため、テーマ設定からアウトプットまで1人で完結することが多く、職種の異なる4人でプレゼンテーションを作成する経験は、非常に新鮮だった。それぞれの得意分野を把握することができ、自分自身の強み弱みも包括的に捉えることができたのは、プログラム最大の収穫と考えている。プレゼンでは論理の整合性と実情を踏まえた現実的な提案を優先したため、英訳を含む仕上げは突貫工事を余儀なくされたが、それなりの完成度には達したと自負している。

チュラロンコーン、タマサート両大学のビジネススクールでの交流に際して、予想はしていたものの、英語力の差を認識させられた。到着日の夜、同級生たちと出かけた繁華街で、接客する現地の人々が当たり前のように英語を使っていたように、自国語だけで産業が完結する日本と、公用語が違う複数の国家に囲まれかつ観光立国として知られるタイとの違いについて、肌で学ぶ機会になった。

プレゼンの各論に関しては、特にチュラロンコーン大学は現状説明にとどまるあっさりとした構成だったことや、タイ側、九大側の構成にダブリが散見されたことを考えると、今後は事前にチーム間で連絡を取り合い双方のニーズを把握した方が、より有意義なディスカッションが期待できると思う。

また、1グループあたり30分の時間配分は再考の余地があるのではないかと。通常のプレゼンテーションでも、聴衆を飽きさせず30分もたせるには相当の技量と話術を要する。私たちの観光チームも、4人がリレー方式で説明する前提で構成を組み立てたため30分を要したが、結果的に論点が分散したことも認めざるを得ない。

一点付け加えておくとすれば、私は取材を兼ねての参加で、このような学内報告だけでないアウトプットを前提に臨んだため、行程を通して相手の肩書の確認やポイントの抜粋に追われ、常に緊張状態にあった。半分第三者のような視点から全体を見た際に、参加人数が多いゆえか、メンバーのプログラムに臨む姿勢の軽重は強く感じた。

余談だが、タマサート大で農業のプレゼンテーションを行った oyl さんから、後日 e-mail を受け取り、細々ながらもやりとりが続いている。

以上

参加感想

報告者： 6期生 寺崎一生

今回の ICABE ではチュラローコン大学とタマサート大学のビジネススクールの学生との交流だけでなく、タイ政府関係者や JETRO 職員など実際の実務に携わる方々からタイの経済について話を伺うことができ貴重な経験となった。また、私にとってタイという国は、今回の ICABE がなければ、生涯行くことのない国だったが、今回の経験を通じて、また行きたい国となった。

私は現在、地方自治体で農業の担当をしており日頃から保護的な日本の農業政策に疑問を感じており、農産物の輸出大国であるタイに行き日本側の農業政策に対してタイの人々がどのように感じているのか知りたいと考えていた頃に、偶然 ICABE の募集を知り、渡りに舟といった感じで参加させて貰った。結論から言えば、日本の農業のあり方などタイ人にとってはあまり関心のないことのように感じられた。様々な講義や議論を通じて感じたのは、「欲しければ売れるし、欲しくなければ売らない」というシンプルな考え方で、米を例に挙げるなら、米を高値で購入してくれるなら米を販売しても構わないが、別に米を買ってもらわなくてもバイオ燃料など他にも利用できるから別に構わないというような感じであった。そのスタンスには自分たちは世界の経済がどうなっても最低限食べていけるという自信から来る余裕が垣間見え、タイと言う国が持つ数値には表れない国の豊かさがひしひしと伝わって来た。

自動車産業のディスカッションの中でも、日本側の学生からタイ側の学生に対してタイが国産車を作らないことに疑問を投げかけていたが、タイ人は国産車に対して私たち日本人が抱くほどの執着は持たず、これも豊かな国土を持つタイ人の余裕から来る考え方なのだろうと思われた。

学生とのプレゼンテーションやディスカッションについては、その議論以前に語学力の差を痛感させられた。どれだけ優れたアイデアがあったとしても、まずは相手に伝えることが出来なければ意味がなく、私のプレゼンテーションでは、ただ単に予め作成していた文章を音読しただけで、十分に議論を深めることが出来ず本当に歯痒い思いをした。今になって思えば、プレゼンテーションの内容自体では決してタイの学生の発表に比べて内容的に劣ってはいなかったが、場の雰囲気や全体の流れとしていい印象を与えられなかったことは反省点として挙げられる。

ただ、確かに多くの反省点もあるが、その一方で、普段話すことがなかった5期生の方々との混成メンバーで短期間でありながらも議論を重ねて協力して何らかの形に仕上げた事は今後の自信になり、メンバーと共に過ごした時間は何にも代え難い貴重な財産となった。

最後に、今回の ICABE では、多くの方々のご支援、ご協力のおかげで貴重な体験をさせていただき、改めて皆様に感謝を申し上げます。また、今回の ICABE は参加希望者が多かったため、多数の辞退者のなかで実施されたプログラムでも、楽しいはずのプログラムが、当初はかなりの重圧となり憂鬱にも感じられました。しかし、プレゼンテーション等の準備作業を重ねるにつれて、そ

のような気持ちは忘れてしまう程、辛く楽しい作業となりました。この ICABE での貴重な経験が今後の自分の糧となり、更なる成長を遂げられるものと確信しています。

以上

参加感想

報告者： 6 期生 八尋大八

今回 ICABE に初めて参加した私にとって、訪問先がタイであったことはとても幸運であったのではないだろうか。チュラロンコーン大学とタマサート大学というタイを代表する 2 校に公式に訪問できたことと、そこで我々と同じようにビジネススクールに通う彼らの情熱と勤勉さに触れることができ、改めて自分自身を振り刺激と心地よい焦りを感じることができた。

日本ではまだまだビジネススクールに通う人の数も少なく、学生同士のレベルを比較することは難しいかもしれないが、こうやって海外に出て異なる文化を持つ学生同士がビジネスという共通のテーマについて議論を交わすことは、いやがおうにもそれぞれの実力と人間力が試されたのではないだろうか。どんなにいいアイデアやビジネスモデルもそれを言葉にして相手に伝えることができなければ成り立たないであろう。ビジネスとはお金を基準としたコミュニケーションであり、競争の場であるということを改めて感じる事ができた。しかもタイの長い歴史と文化を受け継ぐ彼らとの交流であったからこそ、殺伐とした競争ではなく切磋琢磨してお互いを高めあうという深い思いやりに満ちた交流であったように思う。これは日本が今後アジアのビジネスにおいてリーダーシップを発揮するために必要不可欠な要素ではないだろうか。

また事前の準備においては、チームで一つの目標を共有しそれぞれが自分に任された役割を果たすチームワークの重要性やリーダーシップのあり方も学ぶことができた。自分たちのいる世界での価値基準で考えるのではなく、相手の国の状況や文化をも考慮しながらの準備は、まさにビジネスにおいて最も重要なことを我々に教えてくれていた。これは自国内の同じような文化や生活習慣を持つ環境では、すなおに感じる事が難しいのではないだろうか。国や文化、チーム内での考え方の違いこそが我々に問題提起と成功の鍵を与える。その後もチームで旅を共にすることで直前準備から本番の舞台まで同じ時間を共有できたことで、世代を超えた友情と信頼を互いに与えてくれたことは、もしかすると今後もこの旅での一番の宝なのかもしれない。

以上

参加感想

報告者： 5 期生 富松寛考

2 月の南京に続いて自身 2 回目の ICABE 参加となった。今回は訪問先がタイと言うことで、全般の手配・調整役として参加しましたが、自動車産業チームの好意により出発直前になってメンバーとして加えてもらい、現地ではプレゼンを含めて学校交流にも積極的に参加することが出来た。

とは言え今回は、参加者数が 19 名とこれまでにない大人数での訪問となったことに加え、2 校の訪問による両大学との日程等の調整など事前手配が大変ではあったが、タイへの ICABE は自分に課した QBS 在学中での一つの大きなミッションであると考えていただけに、実際に実現し、そして無事終了したことに感謝と感激の気持ちでいっぱいである。

チュラロンコーン大学、タマサート大学の 2 校の訪問では、学生間による積極的な意見交換や QBS への交換留学生との交流など充実した時間が過ごせ、両大学の対照的な校風を参加者は体感できたことと思う。

その他にも、九州大学 OB で現在タイ商務省勤務のパタイ氏との夕食会を兼ねた意見交換会で、両国に精通したパタイ氏ならではの視点による考え方や、JETRO バンコクを訪問した際での専門官によるタイ経済分析など、自身にとって非常に興味深い内容のものとなった。

アジアが持つエネルギッシュな人のパワーを体感する上で、良い意味での『混沌』という言葉が合う街がバンコクだと思う。自分が伝えたかったタイが少しでも多くの人に理解され、身近に感じ取ってもらえたか気になるところである。そういう意味でも、今回参加したメンバーがどのように感じたか興味津々である。特に、延泊した一部参加者にはただ観光地を巡るのではなく、現地に溶け込みローカルさを体験してもらったが、そのことでバンコクをより満喫したのであれば嬉しいかぎりである。

ICABE は学校交流であると同時に参加者自身が自国を含めて見聞を広げる絶好の機会であると考えている。従って、今後ともこの事業が継続して行われることは勿論であるが、今回の様に修了生枠を設けるなど新たな試みを取り入れ、より充実した内容になることを期待したい。

最後に改めて、今回がタイであったことに感謝したい。

以上

参加感想

報告者： 6 期生 小林亜希子

今回の THAICABE では、チュラロンコーン大学とタマサート大学を訪問することで、事前準備の段階で得た知識を実感することと、あらたな課題を見つけることができた。

事前準備の段階で、なぜ外国企業はアジアの中でタイを選ぶのかということをグループで話し合うことがあった。親日派であること、宗教が仏教で統一していること、おだやかな国民性などいろいろな項目が考えられ、4 日間の滞在を通し、知識を経験に変えることができた。

また、「自動車産業」のプレゼンを通し、「日本」という国を客観的な視点でみることができた。そして、「日本」と「タイ」の比較を通じ、同じ「アジア」として視点を見つけることもでき、世界におけるプレゼンスを考える大変良い機会であった。

課題として「プレゼン力を鍛えねばならない」という自分自身の新たな問題点を見つけることができた。タイの学生との交流を通して、自分の意見の見せ方をもっと勉強する必要があると感じた。英語力はもちろんのこと、意見を述べつつ相手の興味関心を引き付けるようなプレゼンができるように練習していきたい。

以上

参加感想

報告者：5期生 江上直人

今回の ICABE 参加し、初めてタイを訪問したことは、私がこれまでタイという国に対して抱いていたイメージを良い意味で 180 度変えてしまうほど、大変貴重な経験となった。

バンコクには比較的新しく状態の良い日本車が多く走っていた。大袈裟ではなく走る車の大半がトヨタ車やホンダ車であり、むしろトゥクトゥクなど旅行者が期待するような乗り物はほとんど見当たらなかった。空港からホテルに向かうタクシーがスピード違反で検挙されたということもあったが、独特のデザインで建てられた高層ビル群を縫って走る車中で早くも先入観は覆されバンコクの勢いに圧倒された。

タイは農業国であるというステレオタイプのイメージも、JETRO 訪問で改めることになった。依然農業はタイにとって重要な産業の一つであることには間違いのないのだが、GDP 構成比上ではもはや 9.9%にすぎず、製造業が 34.7%を占めるまでになり、その中でも自動車産業が最大の産業である。しかし、国策上国産車は製造せず、日本メーカーを積極的に誘致した結果、トヨタ、日産、ホンダ等々のメーカーが進出し、生産 120 万台体制にまで成長し、そのうち 90%超を日系メーカーが生産・販売を行っている実績を勘案すると、市中を走る車の異常な程高い日本車率も納得できた。又、ガソリンにバイオエタノールを 20%混合させた E20 という燃料も導入済みということで、メーカーには厄介なのかもしれないが、日本などよりもエコ路線が一步進んでいるようであった。又、帰国後すぐに今回の政変を報道で知ることになり、担当者がタイ進出のリスクの大きな要因の一つとして政治リスク 国王リスクについて触れていた点も結果として印象強く残ることになった。

タイを代表する大学である、チュラロンコーン大学及びタマサート大学を訪問した際には、肌で感じた優秀なタイの学生の勢い、私自身の力不足、日本と異なるタイの大学の雰囲気等非常に刺激を受けた貴重な経験となった。

滞在中や最終日のバンコク市内観光では、洗濯物が普通に干してあるような水路を航行するローカルの人々が普段利用するような水上バスで近代的な町並みとのギャップ驚き、意外とかわいい雑貨やポップなどのデザインに目を見張り、タイ式マッサージで癒され、タイの若者文化の勢いに圧倒され、タイの学生からは刺激を受け、あっという間に過ぎた滞在ではあったが、その分濃縮された濃い時間を過ごすことができた。今回の ICABE を通じ、肌で感じ、考え、経験したことを今後の私に活かしていきたい。

以上

参加感想

報告者： 6 期生 岡本洋幸

ICABE での海外訪問はビジネスでも観光でもない旅であった。だからこそ、これまでの海外訪問とは違った経験や発見が可能であったと考えられる。そこで、そのいくつかを紹介したい。

私にとって最も重要な経験は、海外で現地の教員と学生を前にプレゼンテーション(テーマは国際観光)を行ったことである。ICABE に応募した理由も、ここにあった。チュラロンコーン大学では、プレゼンのまとめりと自身の英語力には改善の余地があったものの、プレゼンをなんとかチームでやり遂げることができた。また、タイの学生の語学力や巧みなプレゼンテーションには驚かされ、ビジネススクールで学ぶ同じ学生として差を感じた。このように自分自身の位置を再確認できるのも、ICABE の魅力である。

チュラロンコーン大学で行ったプレゼンのアイデアは、同期の河本君の考えを発展させたもので、バックパッカーの聖地であるバンコク・カオサン通りを軸にすることと、このテーマを元にタイ側にメリットのある提案を行うことが、チームの方向性であった。限られたタイの情報と、各自が持ち寄ったアイデアをもとに、プレゼンの内容を組み立て、具体的な提案を考える作業は予想以上に苦勞し、発表当日まで手直しが続いた。しかし、チームのメンバー各自が自分の考えを相手に伝え、メンバーが頭で考えていることを言葉にし、さらに同じベクトルにまとめていく、そのような作業をチームで行うことは、今後の仕事でも非常に役に立つと考えている。チームによるプレゼンテーションの事前準備は、私にとってタイ訪問と同じぐらいの重要性を持っている。

プレゼンテーションの事前準備において、タイに関する情報を集めたことで、九州(日本)とタイに多くの共通点に気づき、次第にタイに親近感を持つようになった。タイは九州と同じように自動車産業や農業が盛んで、屋台など食文化にも共通点があり、沖縄特産の泡盛がタイ米を原料にしている。また、少子高齢化など、共通の社会問題を抱えていることも分かった。

タイは親日的であることも、事前準備と訪問を通じて実感した。タイでは日本のアニメが放映されており、学生の大部分はアニメを通じて日本文化に触れている。数十年前には、日本人将校とタイ人の交流を描いた「メナムの残照」(作者はタマサート大出身)がベストセラーになり、現在の年配の方にも親日的な方が多いようである。また、5期生の富松さんからタイに関する様々な話を伺う事ができたことは、タイを理解する上で有益であった。

私は、上海や青島、ソウルなどをこれまで訪問した経験があったが、これらの都市はアジアの北東地域にある。今回、タイ・バンコクを訪問したことで、アジアの広さや類似性を実感することができ、物事を考える軸が北東アジア中心から南に移動し、視野の拡大につながった。

以上

参加感想

報告者： 6期生 中川将志

今回、チュラロンコーン大学での観光をテーマとするプレゼンテーションを担当させていただいた。私にとって外国人を相手に英語でプレゼンテーションを行うのは初めての経験であり、大変貴重な経験となった。また、タマサート大学の学生と昼食をともにし、交流できたことは、タイ人を理解するのに貴重な経験となり、大げさではあるが今回の ICABE の体験は人生観が変わるほどの大きなものであった。

私が勤務する日本電産株式会社もタイに進出するメーカーであるが、今まではあまり意識をしていなかった。今回の体験で最も考えさせられた事はタイの貧富の差についてである。我々日系メーカーが労働賃金の安価で、ものづくりに向く国民性を持つタイに進出する事で、我々日系メーカーだけが富を享受するのではなく、タイの貧しい地域の方々の雇用も増えて貧富の差が解消される事につながるのであれば、それは素晴らしい事だと思えた。

以上

参加感想

報告者： 5 期生 篠崎真美

QBS 入学直後の 2007 年 4 月、講義終了の帰り道に突然背後からタイ語が聞こえてきた。タイ語を理解できない私でも、それは語感的にとてもスムーズで「生きたことば」であることは“一耳瞭然”であった。それが、QBS 同級生富松寛孝氏との最初の出会いである。

富松寛孝氏は幼少期タイに滞在され、いまは福岡のタイ政府観光庁でタイ観光誘致の業務を担っておられる。彼との出会いから「是非 ICABE をタイでできないか」と富松氏に迫った日から 1 年半後の 2008 年 8 月 21 日～26 日、富松氏、教職員の方々の献身的貢献により初のタイの大学との大学交流が実現した。

私は QBS 入学前から、九州大学教職員として ICABE の発足、活動状況など永池克明元九大教授が築き上げられたご功績を伺う機会が多かった。しかし、中国ビジネスを専門としてきた私は 16 年前既に北京の大学に推薦留学を経験しており、九州大学教職員として中国の大学との産学官連携を推進していたために、QBS では、中国以外のアジアの国で研修をうけたいと長く希望していた。そのため、今回、富松氏という偉大な同級生のお蔭で、念願かなっての THAICABE が実現し、参加することができたのは、感激一入である。

さて、前置きが長いですが、本研修旅行は 2008 年 8 月 21 日からの 4・5 日間、タイの TOP2 の大学との交流、JETRO 訪問、市内視察、そして最終日は機内 1 泊と、まさに「光陰矢のごとしたり研修」であった。総勢 19 名の学生、OB、教員の参加で、いままでかつてない大人数での大移動である。しかし完璧を期するコーディネーターの周到な準備と手配と満面の笑顔のおかげで、スムーズに、事故もなく、楽しく日程をこなすことができ、大満足で有意義な研修旅行となった。

今回の訪問大学、タイのチュラロンコーン大学、タマサート大学は、日本の東大、京大と言われる TOP エリート大学である。私にとってのタイ国は、文化、料理、リゾート、歴史建築物、宗教、象とあげるときりがないほどお気に入りが多い国であるが、いままでは、あくまでも観光者として、ときにはバックパッカー、ときにはリッチリゾート旅行と、タイを満喫していた。しかし、今回は、MBA コースにおける「ビジネス交流」ということで、タイのエリートが「どのようにビジネスを捉えているのか」、「どのようなビジョンをもっているのか」、ディスカッションへの期待は相当なものであった。この点においては、正直いって、自己担当の「雇用」については、質問も全くなく、あまり活発な議論が行われず、何かしらの新しい価値観や議論の争点なども表面化しなかったことは、非常に残念に思っている。

自己グループのプレゼンテーションについては、ビジュアルや発表の主旨を一貫させることを、プレゼンテーション作成で重視したことにより、グループでの発表実演の準備が不足していたことは否めない。特に、自己の担当部分については、当日朝までほぼ徹夜でばたばたと作成を続けたこと、その疲れが頂点に達し、よりもよって夕方最後の本番のときに、全く聴衆をみずに原稿を捧

読みしてしまったことは、ビジネスパーソンとしてのタイムマネジメントができておらず、仕事とは異なる「研修」であるという甘い意識を持ちえ、中途半端な結果に終わらせてしまったと、多くの反省を残すことになった。これは自己の今後の課題にしたいと思う。

英語力については、QBSにおいては、徹底的に英語で議論を交す機会が少ないことから、学生が英語でのディスカッションに慣れていないことが、自己も含め QBS 側の大きな課題であると感じた。その点タマサート大学の学生は、英語で講義される APU 学部卒と中学・高校とアメリカ留学経験をもつ学生がプレゼンテーションを行ったからか、彼らの英語力、プレゼン力は勝っていたといえよう。

また、タマサート大学のテーマ「農業」において、タイと日本の学生が共にグループワークにて時間を共有し、協力しながらアウトプットを出す演習形式は、プレゼンテーションをするべきと考えていた、一種の常識からの意識改革で、新鮮さを感じた。その点 QBS のプレゼンは、非常に単一的で固定化されすぎているようにも思えた。

但し、「観光」、「自動車産業」、「農業」、「雇用」ともに、九大 QBS チームのプレゼンテーション全般に感じたのは、内容の深さと精巧さ、そしてグループワーク力である。プレゼンテーションの準備に割いた時間は、QBS の方がはるかに多かったであろうことは、容易に察することができた。

なお、タイ学生との懇親会において、学生という立場で自由に率直な意見交換ができたことも、とても新鮮であった。「微笑みの国タイ」が、両 TOP エリート大学のいたるところに溢れており、華人の学生とは、中国語で意思疎通を図ることができたなど、華人の多さにも驚いたが、それよりもあたりの柔らかいタイの女子学生には、一種の癒しをもらえるほど、大学全体をゆったりした雰囲気か漂っていたように思う。

そして、今年度後期から九州大学に交換留学生としてくる KRUTTIN さんと ALUT さんとのひとときの交流や、前期講義で全く顔を合わせることもなかった 6 期生と肩を並べ、美味しいタイ料理、タイビールを満喫し、同窓として友情を深めることができたのは、最高の成果であったと考える。

未筆ながら、志望者多数のなかで、今回 THAICABE に参加することができ、貴重な経験を得る機会を与えていただいたこと、また、いままで ICABE の設立および歴史を担ってこられた教員および先輩の方々に、そして THAICABE の実現と成功を導いてくれた我ら同級生の富松寛考氏に、重ねて心から感謝を申し上げたい。

以上

参加感想

報告者： 5 期生 村田素子

タイの大学チュロンコーン大学とタマサート大学の MBA 学生と交流することによりタイの学生のビジネスに対する意識とタイ文化を知る事ができ非常に価値のある経験が出来た。

タイの学生の平均年齢は非常に若かった。タイの学生に聞いたところ数年社会人経験の後入学したということだった。また、女性の社会進出が多いタイではやはり MBA を取得する学生の中にも多くの女性学生がいた。日本とは異なって女性が企業で随分活躍することの多いタイでは当たり前なのだろうと感じた。日本も変わりつつあるが、まだ男性社会というイメージが強く、タイでは女性が企業で多く活躍しているようである。女性の意識も働くのが当たり前と言った感じであった。

我々のプレゼンテーションテーマの一つでもあった雇用の中で女性の職場環境を取りあげたが、タイの女性たちもまた子育てをしながら仕事をしているようだ。出産後の職場復帰はタイでは当たり前のものであるが、やはり子供をベビーシッターや保育所に預けるということに抵抗を感じつつ働く上では仕方がないという印象を受けた。しかしながら日本と違うところは、ベビーシッターの普及や保育所の月謝が安いところである。日本ではベビーシッターを活用するという事は殆どなく、また保育所に入れるという面でも月謝が高すぎるという議論になった。女性の社会進出においては多くの人と企業の協力と女性が働ける環境の整備が必要であるとつくづく感じた。

タイはやはり観光の国である。彼らのホスピタリティー精神は見習うべきであると感じた。彼らのそのホスピタリティーの精神は、彼らの文化でもあると言える。ホテルや大学の訪問でも人々の親しみ易さと心遣いを感じた。穏やかなタイの人々は寺院が多くあるタイだからこそ、ホスピタリティーの精神が養われるのであると思う。両手を合わせて感謝の気持ちを表すタイの人々の文化はとても素晴らしいものだった。一度行っても、もう一度行きたくなる、そのような国である。

学生やタイの文化から多くの事を学ぶことができ、短い期間ではあったが非常に充実した日々を過ごす事ができた。私もタイをまた訪れたいリピーターの一人になりそうだ。

以上

参加感想

報告者： 5 期生 山本英樹

タイには、会社を退職して年金で暮らす日本人が数多いと聞いたことがある。その日本人の気持ちに身にしみて分かるほど、タイの良さが感じられた日々であった。

タイに降り立った時は日本の真夏よりも少し涼しさが感じられたが、それでも歩くと汗ばむ気候であった。空港からホテルへ向かう途中、さっそくタイの洗礼を受けた。交通渋滞である。片側 3 車線の広い高速道路なのに、車がぎっしりすし詰め状態で、さらに運転が荒い。タイでは警察が渋滞のひどいところに立ち、信号の代わりをして渋滞をコントロールしているそうで、タイで運転するのは難儀だなと感じた。

タイが経済発展をしているのは、うまく外国の企業を取り込んでいるからであると感じた。特に自動車産業では日本の自動車メーカーを惹き付け、工場を誘致し、東南アジアにおける生産拠点に築き上げた。これは、タイ政府の税制優遇などの政策だけではなく、タイ人の人柄、文化も大きな要因であると現地で感じた。タイの人はいつも笑顔で、優しい。ホテルやレストランでのサービスもよく、訪れた大学では熱烈なおもてなしを受けた。また、食べ物がどれも美味しい。ビジネスにおいてもこのタイの心地よさが日本人を惹き付け、日本企業がタイで成功していることを実感した。

一方で、ICABE が終わって帰国した後一週間足らずで、バンコクで暴動が起きたというニュースには驚いた。タイの人に暴動を起こすという攻撃的な側面があるとは、想像ができなかったからである。この政治の不安定さはタイでビジネスを行なう上でのリスクになると感じた。

国際ビジネスを行なう上で、相手の文化、土地、人柄を知ることが重要であり、今回のタイ ICABE を通じてタイを知ることができたのは非常に貴重な機会であった。タイの人と文化に直接触れることができ、大変充実した日々であった。

最後に、このタイでの ICABE を素晴らしくコーディネートして頂いた、富松氏と小寺氏には感謝したい。

以上

参加感想

報告者： 6 期生 河本敬嗣

今回、ICABE に参加することによって、タイを再訪させて頂き、またこのプログラムに参加しなければ体験できない価値ある経験を数多くさせて頂いたことに、心より感謝している。

ICABE 参加は、私に 7 年ぶりのバンコク訪問の機会を与えてくれた。異国で様々な人に出会いその文化を知ることは私にとって刺激や活力を得ることが出来る最高の機会であり、特にタイは私にとって最もワクワクさせてくれる国のひとつである。私は 7 年前までに幾度かバンコクを訪れているが、今回の参加は、この 7 年間ににおけるバンコクの変容や今後のタイの可能性について知るよい機会となった。

まず、バンコクに到着して驚いたことは、前回の訪問から 7 年間の間に、新国際空港や地下鉄、モノレール等が整備され、更にはそれによって街の風景や状況が大きく変化していたことである。

以前のドンムアン空港に比べて、スワンナプーム国際空港は格段に規模が大きく、デザインも近代的なものとなっている。ドンムアン空港を屋台と例えるなら、スワンナプーム国際空港は近代的な巨大ショッピングセンターであろうか。空港に到着した時に感じる雰囲気は全く異なっていた。街に出ると、地下鉄やモノレールが整備されており、スムーズに目的地へ到着できるようになっている。このインフラ整備が慢性的な交通渋滞の解消にどの程度役立っているか分からないが、少なくとも旅行者としては移動が便利になっており、渋滞や排気ガスも少し軽減されているように感じた。また、街を走る車のほとんどが新しい日本車となっていたことも私の目を引いた。以前より日本の車は圧倒的に多かったが、そのほとんどが古い日本の車であった。しかし、現状は古い車を探すほうが困難なほどである。経済的な発展を遂げている状況を肌で実感した。そして、最も私が驚いたのは、街の清潔さである。街の中で、ゴミやタバコをポイ捨てる人が見られない。話によると、タバコのポイ捨てや喫煙場所に関して法令で規制されており、違反者には罰金を科せられるという。このような点に関しても、日本以上に先進であるように感じた。

今回、タイの行政や JETRO など公的機関の方々から話を聞き、更には、チュラロンコーン大学とタマサート大学の学生と意見交換をすることによって、タイの経済や状況等についてより深く知ることができた。3泊4日の短い行程ではあったが、そこでの交流や経験は私にとってとても有意義なものとなった。

この貴重な体験の機会を与えてくれた大学、先生方、参加メンバーに感謝したい。また、この ICABE での経験を今後の自分の成長に活かしていきたいと考えている。

以上

参加感想

報告者： 4 期生 中西裕二

今回は OB 枠で参加させて頂きました。在校中に ICABE の評判を聞き参加の機会を狙っていましたが果たせず、今回参加させて頂いたことを大変ありがたく思っております。同様の思いを持つ修了生は他にもいると思いますので、OB 枠の存続を願っております。

私はカーナビゲーションビジネスに携わるものとして、タイのモータリゼーションとカーナビゲーション普及の可能性を探ることを、今回の ICABE の個人的な目的として考えておりました。この目的のため自動車産業のチームに参加し、事前の準備と Phatai 氏のお話、JETRO の経済動向説明などから多くの情報を得ることができました。

情報収集の中で、自分の仮説が異なっていたことに気づき、本番の発表でもタイの学生からの意見でその間違いを確信しました。

私は、日本の自動車産業の発展とそれに続くインドネシアや中国の自動車産業の発展の過程をタイも辿ろうとしている雁行モデルであると考えていました。

インドネシアも中国も、欧州や日本の技術を積極的に導入しその技術を基盤として民族系自動車メーカーが成長しています。タイも日本との長く深い関係から日系メーカーが強固な関係を築いていますが、いずれ民族系メーカーを育てる動きが出てくると考えていました。自動車産業は国の産業のフラッグシップであり誇りです。また、民族系メーカーは国民のために必要な車を提供するものであり、国に資本を蓄積する効果もあります。その意味で民族系メーカーは重要な施策であると考えています。

しかし、タイの人々の考えは異なるようです。政府も明確に違う政策を採っているようです。

民族系メーカーを強引に育てるような策は採らず、外国資本メーカーと緊密な関係を築き、タイに定着し輸出に励んでもらうことにより、外貨を獲得し雇用を創出することを第一に考えています。限りある経営資源を有効に使い効率的な発展を目指す現実的な施策ですが、やはり国民気質の影響もあると感じました。

バンコクの活気は相当なものでしたが、ギラギラするような野心、競争心は感じられず居心地の良さがある、そのような人々の暮らしぶりが、国の施策や資本家の在り方にも影響しているようです。この国民気質は、王国であるため国王に委ねられるという安心感、豊かな農業に支えられてきた余裕から来るものであると感じました。経済発展で目指しているものは異なりますが、この国民気質は日本に近く、中でも九州南部の気質に近い、親しみを感じるものでした。

ICABE で現地に赴き直接意見交換をして自分の仮説を正すことにより、より深い理解を得られたと思います。今後ビジネスを考える上で有用なものを得られたと思います。ただ観光で訪問し街を見て回るだけでは、このような理解に達しませんでした。貴重な機会を得られたことに感謝致します。

それでもなお、仕事が災いし観光は叶わずとんぼ返りとなったのは残念です。近いうちに機会を設け訪問したくなる国、それがタイでした。

以上

参加感想

報告者： 5 期生 久枝良彰

ICABE では、村藤先生、高田先生、小寺さん、富松さん、メンバーの皆様に、たくさんお世話になりました。皆さんと、いろいろお話ができて、楽しい思い出ができました。大変ありがとうございました。

今回の最大のイベントであったテーマ別の発表会ですが、準備時間と紙の枚数では我々が勝ったものの、「企画力」「プレゼン能力」「英語力」「おもてなし力」の全てにおいて、日本側は、先方の 2 大学に負けていたなという印象です。もちろん、勝ち負けではないですが、旅の名残惜しさよりも、くやしいなあという気持ちが私にはあります。

これは、今回の事務局や運営という話ではまったくなく、プレゼンの内容そのもの、我々、個々の力不足だと感じたのです。タイの優秀な人はグローバルでも優秀だなあ、優秀なはずの QBS のメンバーはグローバルでは通用しないのか、などと考えさせられました。

後期より留学生が多数参加されますが、ICABE に限らず、例えば英語でのクラスにおいて、「どうして日本人生徒は発表しないのだろう」「日本人生徒は、こんなことも理解していないのだろうか」と思われているかもしれません。

ICABE の時期がちょうどオリンピックの時期と重なり、私が個人的に QBS 代表で来ていると過剰反応を起こしているのかもしれませんが、いずれにしても、今回の ICABE は、私自身、悔しい気持ちが残る、この課題を自己の成長につなげたいと考えます。

以上

参加感想

報告者： 5 期生 鎌田幸治

はじめての ICABE 体験であったが、今まで海外の大学訪問をしたことや交流したことがなく、期待以上に大変有意義な体験となった。また、英語が苦手であるにも関わらず、このような機会をいただき感謝している。

発表準備を通じてタイと日本のつながりを知り、JETRO バンコク訪問やタイ政府関係者のお話を聞くことで確認することができた。また、タイに多くの日本企業が進出しているのは、不思議であったが、政府方針(税制優遇や自動車産業の集積促進)や国民性に起因するところが大きいと感じた。

今回の発表テーマは自動車産業についてタイと九州との比較であったが、方針や生産台数が似ており、またタイは世界でも 15 位の生産国であることに驚くとともに、タイは観光国だという安易なイメージと違う認識が持てた。

バンコクにも驚いた。高層ビルとスラム街が同居しながらも、危険な雰囲気はなく、混沌とした発展するアジアという印象であった。計画的な発展ではなく、道は狭いうえに渋滞が激しく、夜間にはホテル前をゾウが歩いていた(本来は、禁止されている)。アジアの国に共通しているのかもしれないが、車社会に道路インフラが追いついていなかった。

但し、車の運転マナーはよく、譲りあい精神のもと割り込みもなく、上海みたいにクラクションもほとんど聞こえなかった。交通手段は、地下鉄・タクシー・オート三輪・ミニバイク乗り合いと多彩で、それも所定の場所に順番に並んでいるのが印象的であった。ちなみにタイの方は、あまり歩かないとのことであった。

タイの学生との交流も有意義であった。特に、同じテーマで発表を行ったチュラロンコーン大学のクルットさんとは、2 日間にわたって夕食をともにし、懇親を深められた。彼は、9/25 より QBS に留学してきており、私は彼のチューターを務めている。空港に迎えにいき、自宅にも招いた。10/12 ~ 10/13 には、タマサート大学からの留学生も一緒に久住に行く予定である。

今回の ICABE をきっかけに、人的も含めてタイとの交流を深めていくことになったし、事業的にもタイに進出してみたいと思えるプログラムであった。

以上

参加感想

報告者： 6期生 三浦智穂

ICABE では、世界の観点から見た日本・九州を改めて観察し、それを日本人以外の人々に伝えるという、初めての経験をした。島国日本(北海道)で、純粹島国人として育った私は、日本について海外の視点から真剣に考えたこともなければ、そもそも日本という国の産業・経済について、他国との比較のなかで深く考えたことが無かったように思う。グローバル・バリュー・チェーンを構築すべく日本企業が世界基準で頑張っているというのに、それらの点についてあまり考えたことが無かったというのは、QBS 学生として非常に恥ずかしいことだが、ICABE の活動をとおしてそこに気がつくことが出来て良かった。

自分が携わる範疇外と思っていた自動車産業について、海外の人に話すことなど、当然これまで想像したこともなかった。プレゼンに向けて、リサーチをしていくなかで、世界標準の中で日本の自動車産業の取り組み、努力、先進性について誇りに感じるとともに、自動車産業だけではなく、日本が世界に誇れる産業について、その先進性や今後の発展を加速していくために、日本は今後どうすればいいのか、何がイノベーションに繋がっていくのか、という観点で日本の産業を世界比較で考えることができるようになったのは、私自身のイノベーションであった。

タイの交通機関を利用した際に非常に焦りを感じた。タイでは(近隣国もそうだと思うが)あらゆる人種が非常に入り交じっていて、異文化が当然にある、ということが普通に受け容れられているということだった。この点日本人は、自国外の人々に接する機会や、自国外で育った人々と日常的にコミュニケーションをする機会に乏しすぎるように感じた。日本人は、異文化のなかでもっともまれてしかるべきだと思う。

タイのビジネススクール学生と、本来語学力があればもっと伝えたいことや教えて欲しいことがあったのだが、個人的な語学能力において交流に限界があった。タイのビジネススクールの学生の英語力の高さ、プレゼンテーションの巧みさに、非常に刺激を受けた。自分に不足している点を痛烈に感じたので、今後の自分の課題としたい。

以上

(報告書おわり)